

はじめに、本文を書くにあたって、文末の資料を参考に、魏志倭人伝を解釈する条件を4つに整理しました。

①中国の正史として、記述内容(方角及び里程・相手国名など)は信用できるとしました。

・当時(魏及び西晋の時)は、相手国までのルートや所要日数・里程などは軍事目的を考慮してか方角・里程が詳細で、その再現性が高い。何かあったときはすぐ相手国(倭国)へ行ける記載となっています。

②魏志倭人伝の読み方のポイントは、

・魏(中国)側から来た(使者)人が見た倭(日本)の姿であると考えます。

・通った(行った)ところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。使者一行は、中国の”里”で、測定・記録していると考えます。

具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。

ですから“東南奴國に至ること百里。”は、言い方を変えると、行程文「東南至奴國百里」には、動詞がありません。どのように行ったかという、動作や状態を表す言葉がありません。これは、魏(中国)側から来た(使者)人にとっては、目的地に向かっての主たる行程ではなく、わき道を示している考えられます。従ってこの距離は、目的地にむかっての主たる行程には含まれないと考えました。



・そして、これらの部分里程の和は、“郡より女王國に至る、萬二千余里。”となること。

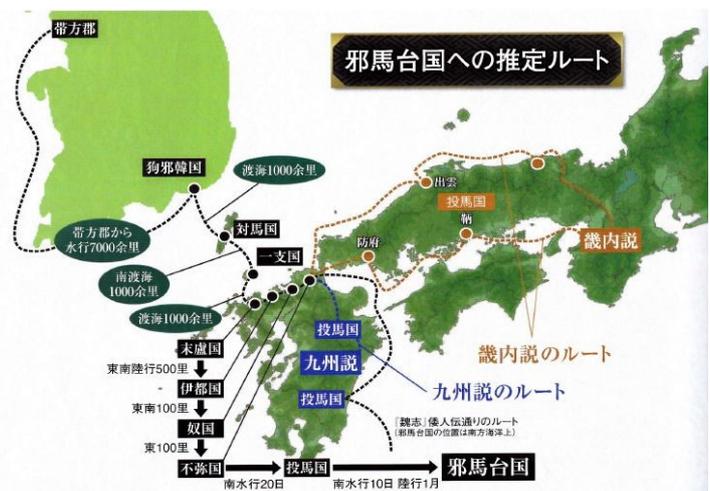
③里程を行くと、魏志倭人伝の最終目的地は、女王国ではなく。さらに、魏(中国)側から来た(使者)人は女王国の先四千余里まで行くのが目的だったことが分かります。さらにその先までも・・・
読み下し：「女王國の東、海を渡る、千余里、復た國有り、皆倭種。又、侏儒國有り。其の南に在り。人長三・四尺。女王を去る、四千余里。又、裸國・黒齒國有り。復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し」

④現在の弥生時代の考古学的出土遺物(漢式鏡・中国製の絹・三種の神器など)だけを見ても魏志倭人伝に書かれている品物については、他県と比べて福岡県それも糸島及び博多湾岸が圧倒的に多くそれだけでも、当時の王権があったことが推測されます。(資料編の福岡県と奈良県の出土遺物比較グラフ参照)

●女王国の所在については、
原文に「到其北岸狗邪韓國、七千餘里」とあります。また郡より女王國に至ること萬二千余里とあります。

よって女王國まで、残り五千余里ですので、魏志倭人伝をそのまま素直に読めば北九州(博多)あたりまでしか行けない計算になると思います。

それでは、具体的に 魏志倭人伝のなぞ
①至と到 ②邪馬壹国の所在 ③一里が何メートルか を検討します。



魏志倭人伝のなぞ ①至と到について

帯方郡から邪馬壹国までの行程表を以下に示します。

1. 從郡至倭 循海岸水行
歴韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里
2. 始度一海 千餘里至對海國
3. 又南渡一海千餘里 名曰瀚海 至一大國
4. 又渡一海 千餘里至末盧國
5. 東南陸行五百里 到伊都國
6. **東南至奴國百里**
7. 東行至不彌國百里
8. **南至投馬國 水行二十日**
9. 南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月

まず、至と到の違いについて考えます。

行程表の1～9までを見ると、「至」が6個と「到」2個使われています。

「なぜ 二箇所だけ到が、使われているのでしょうか。」
「至」と「到」の意味に違いがあるのでしょうか？

さて、5. 東南陸行五百里 到伊都國 を見てください。
意味は、(末盧國から) 東南方向に陸を歩いていくと五百里で伊都國に到る。と解釈出来ます。(右図の実線)

図の右上に糸島半島があって、その右は福岡市です。
図に載っていませんが、左上に壱岐の島があります。

実線の始点は、唐津市で、終点は糸島市です。
唐津市に末盧國(マツロ)、糸島市に伊都國がありました。



始点から終点までの距離は、実測 36.5km となり、東南陸行五百里なので、単純計算で、一里 73m となります。当時は、海面水位などを考慮すると、もっと海が陸地へ入り込んで、長い距離と考えられます。

そして、「到」は、図のように行路が、山沿いや海岸沿いを曲がっていることを意味していて、「至」は行路が直線的なことを示すと考えられます。辞書(漢字源)では、以下の解説がありました

漢字源には、まっすぐ行き届くのを「至」といい、弓なりの曲折をへて届くのを「到」という。

解説：漢字源・デジタル大辞泉プラスの解説

学研プラス発行の高校生向け漢字辞典。初版 1988 年。『改訂第六版』は 2018 年刊行。藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光編。親字 1 万 8000 字、熟語 8 万 8000 語を収録。

もう一つの「到」については

1. 原文：從郡至倭 循海岸水行 歴韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里
読み下し：韓國をへるに たちまち南し たちまち東し その北岸狗邪韓國に 到る と解釈出来ます。

解説：歴る「へる：広辞苑第六版」そこを通過して他へ行く。通過する。 という意味があります。
意味は、はじめは、水行ですが、韓国内の通過は、南へ東へジグザグに歩き進むという記述です。
曲折をへて歩き進む「到」に表現として、あっています。

さて 「その北岸狗邪韓國に到る」ですが、「その北岸」の「その」は、原文に「從郡至倭」とあるので文章上倭国と考えられます。つまり狗邪韓國は、(朝鮮半島の南端で)倭国の最も北に位置していたものと考えられます。つまり倭国は、九州北部～壱岐～対馬～朝鮮半島南部を含むと云うことができると思います。

次に、まっすぐ進む「至」について考えます。

1. 從郡至倭 は、(帯方)郡から倭に至るにはの意味ですが、「至」だから直線的と言っている事になりますが、本当にそうでしょうか。

(帯方郡)から狗邪韓國も對海國(對馬)も一大國(壹岐)も俯瞰すれば直線で結べますので、「至」で表現はあっている。と思います。

帯方郡から倭国まで(一里73mと考えると)73m×12000里=876kmとなって、九州北岸の範囲となります。(短里については、③一里が何メートルかを参照)



2. 始度一海 千餘里至對海國
3. 又南渡一海千餘里 名曰瀚海 至一大國
4. 又渡一海 千餘里至末盧國

この3回は、直線的航路ですので、表現としてあっています。

6. 東南至奴國百里
7. 東行至不彌國百里
8. 南至投馬國 水行二十日
9. 南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月

6～9については、未だ所在地が確定していませんので、残念ながら確認できません。

これまで、倭人伝の記述を「信用できない」という声がありますが、「至」と「到」をとっても正確である事がわかりました。これまで、正確な記述を正確に読解出来ていなかったのかも知れません。

まとめ

- ・「至」は、まっすぐ進む、「到」は曲折をへて進む。
- ・「至」の場合、現在地からの進行方向を示し、その方向に目的地がある。
- ・「到」の場合、現在地からの進行方向を示すが、その方向に目的地があるとは限らない。
- ・もし末路国(唐津市)から伊都国(糸島市)に行く場合、船行ならその行程は直線的であって、その方向に伊都国があるので、「東北水行 五百里 至伊都国」と記述されると考えられます。
- ・2～4には、渡があります。この「渡」は渡るしか方法がない場合、つまり歩行不可の場合です。
- ・1、8、9に水行があります。この「水行」は、「陸行」も「水行」も可能な場合に、「水行」で行く場合です。

魏志倭人伝のなぞ ②邪馬壹国の所在について

1. 長里と短里

中国では、王朝により長里または短里が採用されたと考えられています。周・魏・西晋朝などは短里を採用し、魏の前後の漢と唐で長里が使われていたため、我々現代の日本人は、三国志の倭人伝も長里であると思い込んで、これを疑うことをしませんでした。このため邪馬壹国の所在が、日本列島内にとどまらず、研究者たちは、悩んだ末に、倭人伝の信憑性まで疑う事となっていました。

2. 短里による行路距離（短里については、③一里が何メートルかを参照）

短里で、帯方郡から邪馬壹国までの距離を計算すると（一里 73 m と考えると） $73 \text{ m} \times 12000 \text{ 里} = 876 \text{ km}$ の範囲となって、九州北岸となります。

3. 倭人伝を書いた陳寿は、その知識をどのようにして得たのでしょうか。

古くは、漢代に書かれた「論衡」と言う書物に「周の時、・・・倭人チョウソウを貢ぐ」とありまして、周の二代天子成王（BC1115～1079）のときであり、日本は、まだ縄文時代です。

『論衡』巻一三超奇篇第一八
周時天下太平 倭人來獻鬯草
「周の時、天下太平にして、倭人來たりて鬯草を献ず。」

ですから縄文時代の倭人に関する記録に始まり陳寿の時代（西晋）までの、多くの倭人の記録に目を通した事、その可能性は大いにあります。

そして、匈奴国と戦争状態だった、邪馬壹国の女王卑弥呼は、魏に応援を求め、魏は將軍張政率いる軍事団を派遣しました。この事は、卑弥呼と同時代人であった陳寿にとっても、倭人の記録の中でも重要なものであったと思われます。

將軍張政は、邪馬壹国に20年滞在した事になっています。軍事専門家である張政は、帯方郡から邪馬壹国までの、移動方法・地理（距離・方向・海と道路の状況）や武器運搬・食料調達・住民の協力などについて、徹底的に調査したに違いありません。軍隊が出兵するときは、それ相応の準備が必要のはずです。

そして20年間で、邪馬壹国周辺の国々も視察・調査したに違いありません。陳寿は、帰国した將軍張政から、直接情報を得た可能性もあると思われます。

今まで言われてきたように、「倭人伝は、東を南と間違えている」ということはあり得ません。そう考えます。逆に古くからの資料と新しい將軍張政たちの資料や中国へ朝貢のために来る「往來人」の情報をもとに書かれた国史として、倭人伝の信憑性は、高いと考えられます。

まとめ

・倭人伝の中で、邪馬壹国への行程は、これは中国にしてみれば「朝鮮の東南の大海の中にある遠い遠い倭国から我が魏朝に朝貢して来るほど信頼されている。」と偉大さを示す重要なテーマとなっています。

・陳寿(223年～297年)は同時代に生きた卑弥呼(～250年頃)・張政たちの生の情報で記録し、將軍張政たちの資料は、第二次、第三次の援軍派遣を念頭に置いた軍事的に正確な行程案内で、再現性が高く、その行路をたどれば間違いなく邪馬壹国に行き着くことが出来る。その可能性が大きいと考えられます。

・倭人伝の行程を考える場合、「至」は、まっすぐ進む、「到」は曲折をへて進む。行程であること。
(魏志倭人伝のなぞ①至と到 について を参照の事)

4. 邪馬壹国の所在について

倭人伝の行程の中で、伊都国までの行程については、研究者の間で異論は少ないと思われます。よって伊都国から先の行程について考えます。

①すべてが実行行程の場合

伊都国→奴国→不彌國→投馬國→邪馬壹國 の順に行くとしたらどうなるのか。

まず 不彌國→投馬國を考えます。

原文：南至投馬國 水行二十日

訳：（不彌國から）まっすぐ南の方向、水行二十日で、投馬國に至る。

解釈：九州北部にあると言われている不彌國から次の投馬國は「至」だから不彌國のまっすぐ南の方向にあり、陸行（徒歩）でも行けるが、水行（船）で行くなら20日間必要と解釈できます。

なお、九州北部から直接南へ船では行けないので、東回りか西回りで行くことになりますが、倭人伝にはどちら回りかは書いてありません。

そもそも西回りなら、末盧國や伊都国に立ち寄らず、壱岐島（一大國）から長崎方面へ航海しているはずですし、福岡あたりから南の熊本や鹿児島へ歩いて太宰府を通過し久留米市方面へ行くことのほうが容易と思われる。

東回りについては、倭人伝では、末盧國→伊都国→奴国→不彌國と東へ東へと進んでいる。九州北部から北東に出航し、関門海峡を抜けたら豊後水道を南下し、そして 不彌國の南の投馬國へ向かうには、どこかで西方向に進路を変更しなければなりません。

もし宮崎市や日南市あたりで、西に進路変更すれば、その後陸行しなければならないので、水行20日に合わない。では大隅半島を回って鹿児島湾に入るのか、それとも鹿児島湾に入らず薩摩半島超えていくのか。具体的記述がない。軍事行程が曖昧であるはずがありません。

以上のことから、この文は「不彌國の南方で水行20日の距離のところ投馬國と言う5万戸の大国があります。」という紹介文で、実行（実際に行く、行った）行路ではないと考えられます。これで投馬國は実行行路からはずれて、伊都国→奴国→不彌國→邪馬壹國の可能性が残りました。

次に、奴国→不彌國を考えます。

原文：東南至奴國百里

訳：（伊都国から）まっすぐ東南方向、百里で、奴国に至る。

解釈：「至」だから、 奴国は東南の方向にある。距離は、7.3km（一里73mと考えると）

実際倭人伝には、「魏志倭人伝の読み方のポイント」でも、記述しましたが

- ・（使者が）通った（行った）ところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。具体的には
 - ・「東南陸行、五百里、伊都国に到る」
 - ・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」
 - ・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。

ですから「東南奴国に至ること百里（記録文）は、魏（中国）側から来た（使者）人は通って（行って）いないと考えました。目的地に向かったの主たる行程ではないと考えられるからです。しかし百里と記述されていますので、使者一行の誰かが、奴国までの行程「百里」を（事前を含む）測っていると考えられます。

これで奴国は実行行路からはずれて、伊都国→不彌國→邪馬壹國の可能性が残りました。

次に、不彌國→邪馬壹國を考えます。

原文：南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日・陸行一月

訳：（不彌國から）まっすぐ南方向、（接しているの）0里で、邪馬壹國に至る。

解釈：「至」だから 邪馬壹國の南の方向にある。距離は、書いてありません。

これは、南至邪馬壹國 女王之所都 0里で、行路（目的地に到着）は完了しているからだと考えます。

もし、不彌國からさらに水行十日・陸行一月するのなら、「南至邪馬壹國 水行十日・陸行一月 女王之所都」とされるはずだからです。

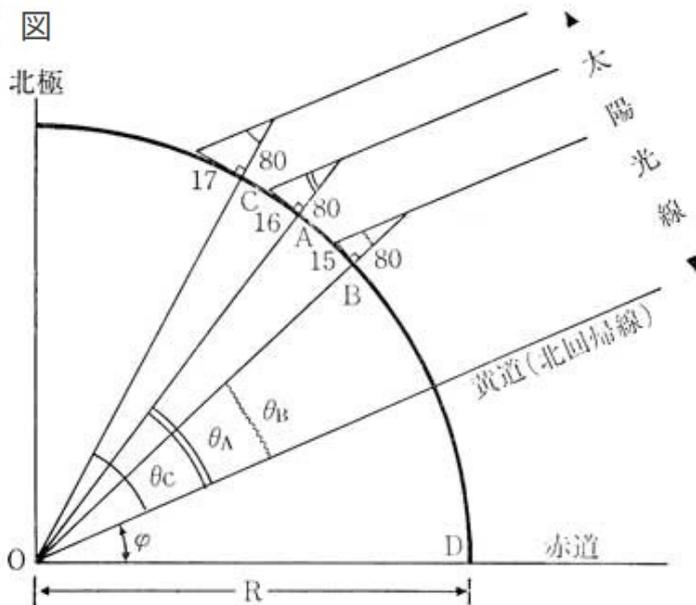
魏志倭人伝のなぞ ③一里が何メートルか考えてみます。

「魏志倭人伝」は、『三国志』の中の「魏書」の中の「烏丸鮮卑東夷伝（うがんせんびとういでん）」の中の「倭人条」という極めて部分的な記事です。「烏丸鮮卑東夷伝」の中では多くの国について記されています。それらの記述の中で、「韓伝」と「倭人伝」だけは、明らかに当時の魏の「里」が用いられていないのです。魏の1里は約435メートルだったといわれています。

ここでは、便宜上その魏の尺度を「長里」と呼ぶことにします。これに対して、「韓伝」と「倭人伝」独自の短い尺度を「短里」とします。

長里を採用すると、帯方郡から邪馬台国までの総距離1万2千余里は5,000キロメートル以上になり太平洋上になってしまいます。

ただ、それでも「短里はなかった」という説もあります。それは主に、邪馬台国を当時の中国における観念的な視点から考えようとする説だと思われそうですが、「倭国を、呉の背後にある大国だと、呉に思わせるため」にわざと倭国を大きく描いたという説だったりします。これで考えると、現在の日本の位置やサイズは大きく変わりますが、行程記述にあらわれる「末盧国」や「伊都国」などを日本地図上に比定するには何ら影響を与えないように思われます。しかし具体的ではないということで、「長里説」は保留とします。



$$\theta_A = \tan^{-1} \frac{16}{80} = 0.1974 \text{ (rad)} = 11.3^\circ$$

$$\theta_B = \tan^{-1} \frac{15}{80} = 0.1853 \text{ (rad)} = 10.6^\circ$$

$$\theta_C = \tan^{-1} \frac{17}{80} = 0.2094 \text{ (rad)} = 12.0^\circ$$

北回帰線の緯度 φ は時代によって大差ないとみなせるので(約 $23.5^\circ \sim 24^\circ$)

A点の緯度 ($\angle AOD$) $= \theta_A + \varphi \approx 11.3^\circ + 23.5^\circ = 34.8^\circ$
 即ち測定地点は約北緯35度付近であり、地理的にみて妥当である。一方地球の極半径を R (約6,357 km) として、

$$\widehat{AB} = R \times \angle AOB = R \times (\theta_A - \theta_B)$$

$$\approx 6,357 \text{ km} \times (0.1974 - 0.1853) = 76.9 \text{ km}$$

$$\widehat{AC} = R \times \angle AOC = R \times (\theta_C - \theta_A)$$

$$\approx 6,357 \text{ km} \times (0.2094 - 0.1974) = 76.3 \text{ km}$$

\widehat{AB} , \widehat{AC} は1,000里であるから、1里は約 76~77 m となる。

明らかに「倭人伝」と「韓伝」の尺度は違うと考えた「短里説」の研究者は、昔からさまざまな方法で、一里を算出してきました。一時的に古代王朝の度量衡が復活したのだとして、その数値を探したり、中国古代の天文学書である『周髀算経（しゅうひさんけい）』の計測法を用いて導き出したり、さまざまな記述と実測値を比べて求めたりしています。その結果、現在、いわゆる短里の1里はおおむね66~100メートルぐらいになっています。

周髀算経（しゅうひさんけい）は、古代中国の数学書。九章算術とともに中国最古の数学書の1つとされています。『周髀算経』の本文は、同時代のことから後漢時代の暦にまで言及していて、自然科学研究者、谷本茂氏は、この『周髀算経』の中で用いられている里単位を計算によって確認しています。それは「一里=約七六~七メートル」です。

これは周の地（観測地点は北緯約三十五度）で夏至の日（南中時）に、地面に垂直に立てた八尺（80寸）の周髀の影の長さは一尺六寸で、南に千里の地においては影は一尺五寸、北に千里の地においては影は一尺七寸となることから、八尺（80寸）の周髀に対する影の差一寸は、地上の距離にして千里に当たります。これが「一寸千里の法」といいます。（図参照）

『周髀算経』には次の観測記録が載っています。これによって検証しますと次のようになります。

「周髀とは、垂直に立てた80寸の観測棒で、夏至の正午に測った周髀の影は、①A地点：洛陽で16寸
②B地点：洛陽の正南千里で15寸③C地点：洛陽の正北千里で17寸である。」

これにより三角関数で算出すると(計算サイト <https://keisan.casio.jp/exec/system/1161228774>)

A地点の、太陽光と周碑の角度 $\theta A=11.30993$ 度(=A地点と北回帰線の地球の中心角)

B地点の、太陽光と周碑の角度 $\theta B=10.61965$ 度(=B地点と北回帰線の地球の中心角)

C地点の、太陽光と周碑の角度 $\theta C=11.99689$ 度(=C地点と北回帰線の地球の中心角)となり

以上の計算で、A地点：洛陽と北回帰線の地球の中心角(図参照)が分かりましたから

これに「現代の知識」でわかっている北回帰線の緯度23度26分22秒=23.43944度を足せば、『周髀算経』の言う洛陽の緯度】が分かります。すなわち、『周髀算経』の言う洛陽の緯度=洛陽と北回帰線の地球の中心角+北回帰線の緯度=11.30993度+23.43944度=34.74937度です。これに対し「現代の知識」で、洛陽の緯度=34度39分=34.65度と分かっています。誤差は0.099度と僅かです。

次に三地点それぞれから北回帰線までの距離を求めます。地球の極を通る全周=40,000kmです。

≪A地点から北回帰線までの距離≫=(40,000km÷360度)×11.30993度=1256.658km

≪B地点から北回帰線までの距離≫=(40,000km÷360度)×10.61965度=1179.961km

≪C地点から北回帰線までの距離≫=(40,000km÷360度)×11.99689度=1332.987km よって、

AB間の千里=1256.658-1179.961=76.697kmで、1里=76.7m

AC間の千里=1332.987-1256.658=76.329kmで、1里=76.4m

以上、『周髀算経』の1里は、=76~77mであることを、検証することができます。

注：北回帰線(北緯23.5度)とは、太陽が地表を直角に照らす範囲のうち、北半球で最も赤道から離れた緯線である。例年6月22日前後に、太陽が北回帰線上を直角に照らし、北半球では一年で昼間が最も長くなる日となるため、この日を「夏至」と呼んでいる。

また「倭人伝」「韓伝」の記述の中から、近似値が求められないだろうかと考えました。しかし、「倭人伝」の中で使える里数はとても限られています。九州島上陸以降については、国々の位置が確定しているとは言えないので、用いることができません。用いることのできるのは、狗邪韓国までの七千餘里と対馬国への千余里、対馬国から一大国への千余里、一大国から末盧国への千余里のみです。

狗邪韓国から対馬国への距離と、一大国から末盧国への距離が、倍近く違っているのは認めつつ、合計3,000里で計算してみました。これに対応するのは、狗邪韓国があったとされる韓国の金海市から、末盧国の到着地点とされる唐津市までの航行距離である約220キロメートルです。1里は約73メートルになります。

それと、もう一つ使える数字が「韓伝」にあります。韓国は、方四千里とされ、なおかつ東西はともに海に至るまでが領域とされています。そこで、朝鮮半島南部の東西距離を用いることができます。4,000里に対応するのは約265キロメートルであり、1里は約66メートルとなります。

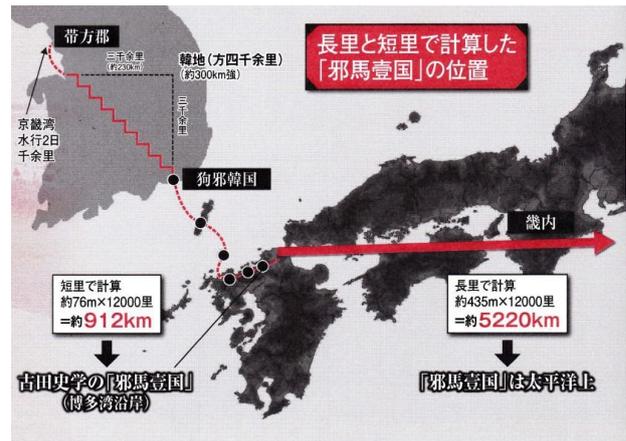
もう一つ、高校生のための「超」教養講座・鮮やかによみがえる 縄文・弥生・古墳時代 第3章の1より 邪馬台国の論争点(DVD)の中で、松木武彦氏(当時：岡山大学)は、里=約100mとして、邪馬台国への道について、説明されていました。魏志倭人伝は、どこかがおかしい、どこをどう直すかが、邪馬台国論争の出発点になる。と語っていました。(いわゆる原文改定の推奨論です。)

以上周髀算経を含め四つの記述から、100メートルと76メートルと73メートルと66メートルという数字が導き出されました。これらの中で、記録があり、検証可能な周髀算経の1里76メートル説を採用することにしました。

結論：魏志倭人伝には、女王国までの里程が書かれていますが、一里の長さは書かれていません。ただ①里程と②方角③女王国までの距離萬二千余里と④狗邪韓国の北岸までの距離七千余里と書いてあるだけです。そこで勝手に一里を約435メートルと考えると、図のように太平洋上となってしまいます。

里程について、狗邪韓国の北岸までの距離七千餘里とありますので、そこまでで行程の「7/12」ですので、残り五千余里です。北九州（博多）あたりまでしか行けない計算になると思います。

結論として、女王国は、北部九州及び糸島博多湾岸付近と考えられます。「不弥国（ふみこく）」の南（里程が書いてないので隣接しています。）が、邪馬壹国（原文）で女王の都する所です。



行程は、郡から水行十日・陸行一月です。

里程は、郡より萬二千余里です。（里程の解釈は、「邪馬台国はなかった」を参照しました。）

「行程内訳と順序は、狗邪韓国まで7,000里+海1,000里+島内(対海國)800里+海1000里+島内(一大國)600里+海1,000里+伊都国まで500里+不弥国まで100里=12,000里」で、約76m×12000里=約912Kmです。

ポイントは、繰り返して申し上げてきましたが、以下のとおりです。

- ①魏（中国）側から来た（使者の報告）人が見た倭（日本）の姿であると考えられます。
- ②通った（行った）ところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。
具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。使者一行は、中国の”里”で、測定・記録しています。
- ③里程について考えてみます。通説では暗黙のうちに一里は約435メートルと考えていますが、これは無茶です。「狗邪韓国（くやかんこく）」の北岸まで七千余里と書いてありますので、尺度が違うと考えるのが道理だと思います。
- ④「狗邪韓国（くやかんこく）」（倭の北岸まで、）七千余里ですので、12,000里－7000里となり残りの里程は5,000里です。とても近畿までは行けません。九州博多湾付近と考えられます。

●更に魏の使者は、四千余里先へ行っています。里程が記述されているのは、測定されているからです。
読み下し：女王國の東、海を渡る千余里、また國あり、皆倭種なり、また侏儒國その南にあり。人の長三、四尺、女王を去る四千余里。また裸國、黒齒國あり、またその東南にあり。船行一年にして至るべし。

解説：女王国の東の海を渡ると、そこにも倭（わ）の人が住む場所があると書かれています。
女王国が、北九州博多湾岸付近の場合、海を渡るとまた中国地方や四国があるので倭（わ）の人が住む場所があるというのは自然です。更に南へ三千里で侏儒國（小人の国）があります。

解説：また裸國、黒齒國あり、またその東南にあり。船行一年にして至るべし。
日本の東南の方向、黒潮の行き着く先は（フンボルト寒流との合流点）南米のエクアドル、ペルー沿岸です。太平洋の向こう側、南米のエクアドルでは、日本の縄文・弥生土器が出土しています。
またHTLV-1：九州・沖縄などの西南日本に多いウィルスで、アメリカ大陸ではアンデスの山奥にだけ見つかっています。（資料編：「倭人も太平洋を渡った」を参照のこと。）

●後漢書・倭伝に“漢倭奴国王”の金印のことが「建武中元二年・・・倭国南界を極める。光武、賜うに印綬を以てす」「倭国が南界を極めたために金印を与えた」と書かれています。また、倭伝の末尾には南界のことが「東南、船を行ること一年“裸国・黒齒国”に至る。使駅（使者）の伝う所ここに極まる」との説明がされています。倭国王が南米のことを光武帝に報告したために金印が与えられたものと考えられます。（了）

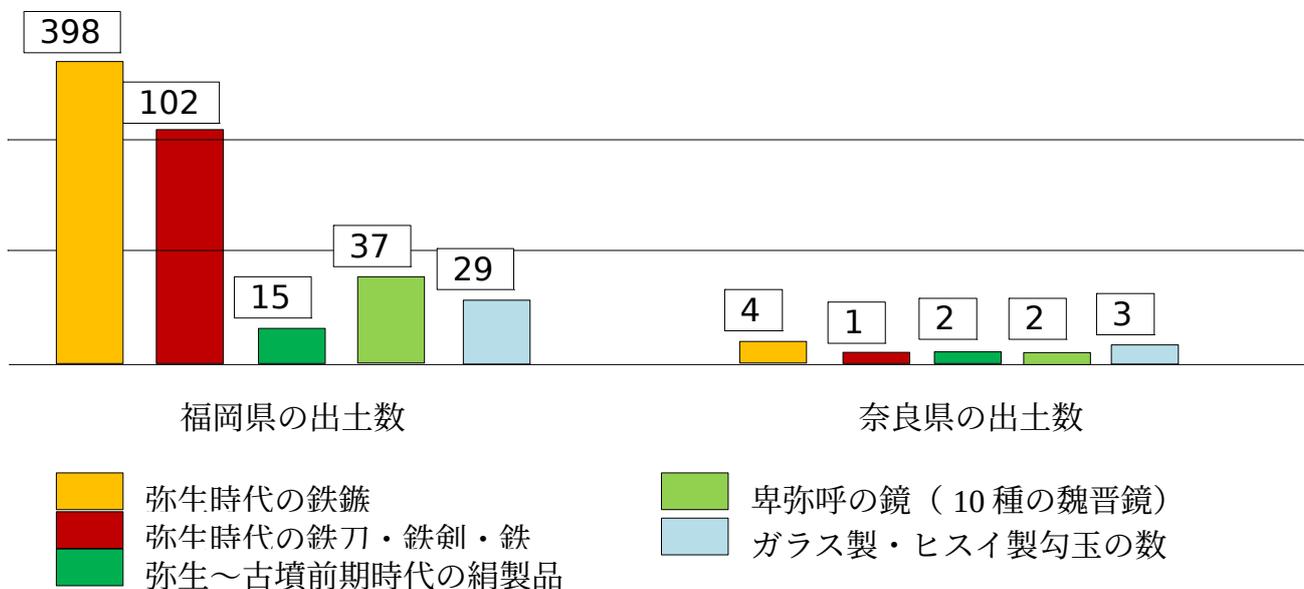
・資料編

①畿内説の魏志倭人伝の解釈・・渡邊義浩（早稲田大学教授）

・倭人伝の背後にある古代中国の世界観・・倭はこうであるはずだと世界観に基づきこうあってほしいという願望や先入観をもって陳寿たちは倭を見ていた。こうした記述はフィクションであり史実や実際の地理的条件に照らして正確ではないのは当然のこと。

・伊都国に、一大率という役人を置いたという記述があり、この大率は中国の刺史のようだと書かれています。刺史とは前漢に設けられた官職で、のちには州知事を指すようになります。刺史は首都圏には置きません。中国の洲はとても広く九州の北半分ぐらいある。そこに刺史がいたということは、逆に言えば邪馬台国はないということになるのです。邪馬台国が九州にあるならば、首都圏にあたる伊都国に置かれた大率を刺史と表現するのは不自然です。伊都国にいた大率を刺史と重ねたのは、伊都国が首都圏ではないから。つまり、邪馬台国が九州にあったという可能性は考えられません。

②福岡県と奈良県の出土遺物比較・・邪馬台国畿内説徹底批判「勉誠出版:安本美典」



③九州説の魏志倭人伝の解釈・・古賀達也（古田史学の会代表）

・邪馬臺国ではなく「邪馬壹国（やまい）」だった。
魏志倭人伝の現在版本には、例外なく「邪馬壹国」あるいは「邪馬国」と記されていますが、この「壹」は「イ」と読みます。ところが多くの歴史学者は「この「壹」という字は誤りで、本当は「臺（台）」だった」という説を主張しています。しかし元々のデータを改ざんして自説に有利な説にしようとするのは、明らかなルール違反「研究不正」です。理系の研究論文でこれと同じことをしたら即アウトです。邪馬臺国説を唱えるのは、イ「壹」よりもタイ「臺（台）」のほうが何となく「ヤマト」に近いからです。

たしかに奈良盆地には政権が築かれ、現在の日本につながっています。だからと言って国名を改ざんして「タマタイ国」が「ヤマト国」になったとするのは強引だと思います。

・女王国の中心部は、博多湾岸にあった。

魏志倭人伝に出てくる「里」が短里なのか長里なのかですが、長里（435メートル）では、5220キロメートルとなり短里（一里76メートル）では、912キロメートルとなって博多湾岸付近に到着することとなります。

・そもそも中国の歴史書というものは、皇帝に読ませるものですから内容がきちんとしていなければなりません。自説に都合が悪い記述があるとあれは間違だったとするのはいかななものかと思えます。

・女王国が文字を使って（外交・政治をしていた）いたと思われる魏志倭人伝の記述があります。

“伝送の文書・賜遺の物、女王に詣る…”

“正始元年 …中略… 倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。”

そうした文字文化の出土遺物が多いのは、北部九州や糸島博多湾岸（筑前中域）で、志賀島の金印や室見川の銘板、弥生時代の硯などが出土しています。

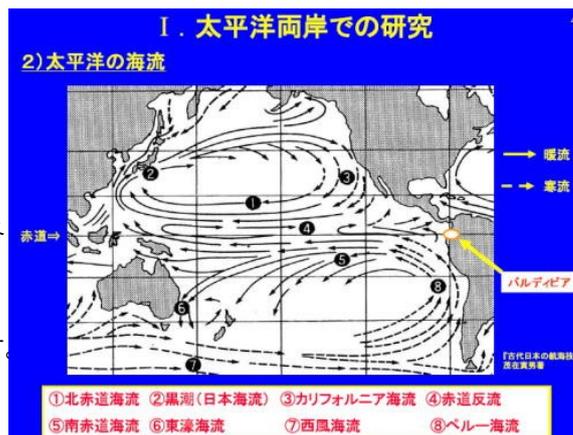
参考資料

- ・倭国伝（20100913:中国正史に描かれた日本）、株式会社講談社、藤堂明保・竹田晃・影山輝圀
- ・別冊宝島 2465（20160627:古代史再検証邪馬台国とは何か）、株式会社宝島社、瀧音能之
- ・図説 日本史通覧（20150225:図説 日本史通覧）、株式会社帝国書院、黒田日出男
- ・日本人になった祖先たち（20070225:DNAから解明するその多元的構造）、NHK出版、篠田謙一
- ・邪馬壹国の歴史学（20160330:邪馬台国論争を超えて）、ミネルバ書房、杉田啓三
- ・邪馬壹国はなかった（19800110:古田武彦説の崩壊）、新人物往来社、安本美典
- ・魏志倭人伝（19720728:魏志倭人伝）、株式会社講談社、山尾幸久
- ・卑弥呼の謎（19721024:卑弥呼の謎）、株式会社講談社、安本美典
- ・日本人の祖先（19750225:日本の歴史文庫①）、株式会社講談社、斉藤忠 以上。

倭人も太平洋を渡った（南米の九州縄文・弥生の土器）

1. はじめに

近年、DNAの解析技術が飛躍的に進み、現在の人類の祖先は20万年頃前にアフリカで生まれ、6～7万年前に世界各地に旅立ち、アジアへは約4万年前にやって来たことが明らかになっています。さらに2万年前ごろから当時陸続きであったベーリング海峡を越えてアメリカ大陸へ渡っています。1万年前には太平洋を船で渡ったグループも出てきました。



中国の史書には、大洋のかなたにある倭人の国のことが書かれています。そして太平洋の向こう側、南米のエクアドルでは、日本の縄文・弥生土器が出土しています。

古代の人々は我々の想像をはるかに越えたダイナミックな動きを行っていたようです。

（図：『古代日本の航海術』小学館、茂在寅男著）

2. 中国史書に描かれた南米の倭人の国

イ) 三国志・魏志倭人伝（3世紀後半に記述）

・卑弥呼で有名なこの本には邪馬台国だけでなく多くの“倭人の国名”が記載されています。その最後のところが「倭国の東南の方向、船行一年にして“裸国・黒齒国”に至る」です。

日本の東南の方向、黒潮の行き着く先は南米のエクアドル、ペルーの沿岸です。

ロ) 後漢書・倭伝 (4世紀前半)

・この史書には“漢倭奴国王”の金印のことが「建武中元二年・・・、倭国南界を極める。光武、賜うに印綬を以てす」「倭国が南界を極めたために金印を与えた」と書かれています。そして、倭伝の末尾には南界のことが「東南、船を行ること一年“裸国・黒齒国”に至る。使駅(使者)の伝うる所ここに極まる」との説明がされています。倭国王が南米のことを光武帝に報告したために金印が与えられたものです。

3. 縄文・弥生の頃のエクアドル・コロンビア

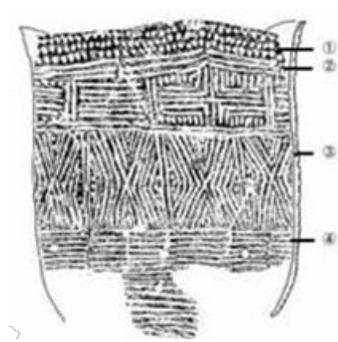
中南米の古代文明といえば、マヤ・インカ・アステカなどが思い浮かびますが、それ以前は南米大陸の北部、今のエクアドル・コロンビアの太平洋岸に古代文明が栄えていました。

イ) エクアドルの縄文文化

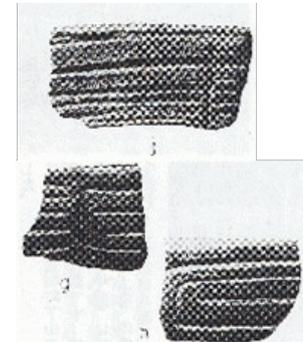
・今から6千年前のエクアドル、現在のグアヤキル市近くの太平洋岸にあるバルディビアに縄文文様をもった高度な土器文化が突如出現しました。この文化は約2千年間続いています。彼らは航海の民で、優れた航海技術をもち、北はメキシコ、南はペルー・チリ、そして東はアンデスを越えてアマゾン地域との交易を行っていました。
・古代において、エクアドル周辺の地域は中南米の交通十字路の中心として栄えていたと考えられています。



曾畑式土器



バルディビア土器



3) バルディビア土器の研究(エクアドル)

◎『エクアドル沿岸部の早期形成時代』1965年

- ・エミリオ エストラダ氏 (グアヤキル市長)
- ・エヴァンズ・メガーズ夫妻 (スミソニアン研究所)

3氏の共同研究でバルディビア土器と縄文土器の類似性そして、縄文土器の太平洋の伝播説を発表。

(エミリオ・エストラダ氏)

View of the Indian Ocean. The same sea, looking

(エバンス・メガーズ夫妻)

6千年前、曾畑式土器が種子島、沖縄に広がっています。同じ頃、南米エクアドルの太平洋岸で突如高度な縄文文様をもった土器が出現しました。黒潮の行き着く先です。

・1960年代に考古学者でもあったグアヤキル市長エミリオ・エストラダ氏とアメリカのスミソニアン博物館の考古学者、エバンズ・メガーズ夫妻が、バルディビアから出土した土器が

- ①縄文前期の九州の土器と同じ文様をもっていること
- ②類似した製作技法で作られていること
- ③それを伝える黒潮という交通手段があること
- ④それまでアメリカ大陸には高度な土器文化が存在していなかったことから「縄文土器の南米への伝播・古代の太平洋における文化の交流」というテーマを提唱しました。

ロ) エクアドルの弥生時代

・紀元前5世紀から紀元5世紀ごろにかけて、エクアドルの北部海岸ラ・トリタ地区からコロンビア南部の太平洋岸にかけて黄金文化が栄えていました。魏志倭人伝の時代です。
・そこでは、弥生時代に北部九州で大量に作られていた埋葬用の大型甕(甕棺)と同じ形をした甕が同じく埋葬に使われていました。高さはいずれも1.5mほどです。

ハ) コロンビアの縄文土器

(B.メガーズ論文より)

・カリブ海側にあるサンハシント遺跡から、縄文時代中期（4～5千年前）に中部日本で盛んに作られていた火炎式装飾の土器が出土しています。

・バルディビアからカリブ海側のサンハシントへはコロンビアの太平洋岸を流れるサンファン川をたどってゆくことができます。この流域に住むノアナマ族にHTLV-1型のキャリアが多くいます。



倭人がここを通りカリブ海側へ移動していた可能性が考えられます。

HTLV-1：九州・沖縄などの西南日本に多いウイルスで、アメリカ大陸ではアンデスの山奥にだけ見ついています。

HTLV-1とは、ヒトT細胞白血病ウイルス

(Human T-cell Leukemia Virus Type 1) の略称で、血液中の白血球のひとつであるリンパ球に感染するウイルスです。

HTLV-1が発見されたのは1980年と比較的最近ですが、このウイルス自体は古くから人類と共存してきたものです。日本では縄文時代より前からHTLV-1の感染があったといわれています。

HTLV-1キャリア数は、世界で1千万人以上、日本で約108万人と推定。沖縄、鹿児島、長崎、高知は世界的に最もHTLV-1キャリアの多い地域です。

海外では中南米、アフリカ、中東とこれらの国出身の住民が多い欧米の都市に偏在しているといわれています。（福岡大学病院 腫瘍・血液・感染症内科 石塚賢治）

南米大陸西北部太平洋岸



下左はコロンビアのカリブ海側にある6千年前頃のサンハシント遺跡から出土した土器片。❖
下右は長野県飯田市の宮城遺跡出土の縄文中期（紀元前3千～2千年）の土器。日本の縄文土器の火炎式装飾は南米からの影響の可能性も考えられます。❖



4. その他南米の日本語地名など

・バルディビアの北にマンタという大きな町があります。その名前は魚のマンタ（エイ）から由来していると思われませんが沖縄ではエイのことをカマンタと呼んでいます。（古川清久）

・その北の海岸にある村がハマと呼ばれています。インディオの古くからの地名です。

・沖縄では最近まで結縄文字が使われていました。同じ結縄文字が5千年前の古代ペルーの遺跡からも見つかっています。その他DNAの類似など、多くの分野で古代の太平洋の交流を示す痕跡が見つかっています。

【倭人も太平洋を渡った（南米の九州縄文・弥生の土器）・・・参考文献】

- 1) 「邪馬台国」はなかった』古田武彦著、2010年ミネルヴァ書房（1971年朝日新聞社の復刻版）
- 2) 『海の古代史』古田武彦著、1996年、原書房
- 3) 『新・古代学』第4集、新・古代学編集委員会編、1999年、新泉社
・文化の進化と伝播（太平洋文化伝播説の紹介）：ベティ・メガーズ
- 4) 『なかつた・真実の歴史学』四号、古田武彦編、2008年、ミネルヴァ書房
- 5) 『なかつた・真実の歴史学』五号、古田武彦編、2008年、ミネルヴァ書房
・裸国・黒齒国の頃の南米：大下隆司
- 6) 『古代に真実を求めて』十一集、古田史学の会編、2008年、明石書店

黒齒国・裸国について

「黒齒国」「裸国」というと、魏志倭人伝の中に登場する、倭人の国とされています。

しかし、「黒齒国」「裸国」ともに、魏志倭人伝が、最初ではありません。

『山海経』（周～戦国・漢代にかけての成立）や、『淮南子』（漢・淮南王劉安撰）・『論衡』（漢・王充著）・『戦国策』（漢・劉向撰）・「海賦」（晋・木華の詩）などにも見える有名な（地名）・国名です。

(A)

・（女王国）東南船行一年、裸国黒齒国に至る。魏志、倭人伝（晋・陳寿）

解説：ぎし - わじんでん【魏志倭人伝】：魏志にある東夷(とうい)伝の倭人に関する記事の通称。3世紀前半ごろの日本の地理・風俗・社会・外交などをかなり詳細に記述している、最古のまとまった文献：デジタル大辞泉の解説

・是に於て、舟人漁子、南に徂（ゆ）き、東に極（いた）る。或は[ゲンダ]（海亀）の穴に屑没（セツボツ。チリとなる）し、或は岑敖（敖は、山かんむり。シンゴウ。険しく鋭い山）に挂涓（涓はさんずいナシ。ケイケン。ひっかかること）す。或は裸人の国に掣掣洩洩（セイセイエイエイ。風に任せて漂うさま）し、或は黒齒の邦に汜汜悠悠（ハンハンユウユウ。流れに従うさま）す。文撰、江海、海賦（晋・木華）

解説：かい - ふ【海賦】：『名』海を題材にした賦。

※和漢朗詠（1018頃）上「山経(せんぎやう)の巻の裏(うち)には岫(くき)を過ぐるかと疑ひ 海賦の篇の中(うち)には流に宿するに似たり〈橘直幹〉」〔齊書 - 張融伝〕：精選版日本国語大辞典の解説

(B)

・昔、舜は有苗（ユウビョウ。南蛮。一説にミャオ族）に舞い、禹は袒（裸になること）して裸国に入れり。
：

是を以て聖人は、其の郷を觀て宜しきに順ひ、其の事に因りて礼を制す。其の民を利して其の国を厚くする所以なり。被髮（ヒハツ。髪を結わず冠を付けない風俗）文身（ブンシン。入れ墨）、錯臂（サクヒ。腕組みして立つ姿勢）左衽（サジン。襟が左前）は、甌越（オウエツ。甌江に住む越族）の民なり。黒齒（コクシ。お歯黒）彫題（顔に入れ墨）、是冠（是は魚へん。テイカン。鯰の冠）朮縫（朮は禾へん。ジュツホウ。着物の縫い目が粗い）は大呉の国なり。礼・服同じからざるも、其の便は一なり。戦国策、趙、武靈王（漢・劉向）

解説：せんごくさく【戦国策】：中国の史書。33巻。前漢末の劉向(りゅうきょう)編。成立年未詳。戦国時代に諸国を遊説した縦横家の策謀を国別に集めた書。国策。後漢の高誘が注を加えた33巻本があったが、そののち半分近くが散逸。：デジタル大辞泉の解説

・禹の裸国に入る、裸にして入り衣にして出づれば、衣服の制は夷狄に通ぜざるなり。禹の裸国に衣服を教ふる能はざるに、孔子何ぞ能く九夷をして君子為たしめむ。論衡、問孔（漢・王充）

解説：ろんこう〔ロンカウ〕【論衡】：中国、漢代の思想書。30巻85編。1編を欠く。後漢の王充著。迷信の打破、天人相関説をとる漢代儒教の不合理性の批判、実用的な創造性のある文学の要求などを論じたもの。：デジタル大辞泉の解説

(C)

・下に湯谷（ヨウコク）有り。湯谷の上に扶桑有り。十日の浴する所。黒齒の北に在り。山海経、海外東経（周～戦国・漢）

解説：せんがいきょう〔センガイキヤウ〕【山海経】：中国古代の地理書。18巻。作者・成立年未詳。戦国時代の資料も含まれるが、前漢以降の成立とされる。洛陽を中心に地理・山脈・河川や物産・風俗のほか神話・伝説などを収録。：デジタル大辞泉の解説

・東南自り東北方に至る、大人国・君子国・黒齒民・玄股民・毛民・労民有り。淮南子、墜形（チケイ）訓（漢・淮南王劉安）

解説：えなんじ〔エナンジ〕【淮南子】：中国、前漢時代の哲学書。21編。淮南(わいなん)王劉安(りゅうあん)が編纂(へんさん)させた「鴻烈(こうれつ)」の現存する部分。道家思想を基礎に周末以来の諸家の説を取り入れ、治乱興亡・逸事などを体系的に記述。：デジタル大辞泉の解説

・（黒齒国）其の人黒齒にして稻を食ひ蛇を啖（くら）ふ。湯谷の上に在り。高誘注（後漢・高誘）
解説：高誘注せんごくさく【戦国策】を参照のこと。

さて、6つの史料を引用しましたが、これらは3つのグループに分けることができます。

Aグループは、魏志倭人伝型です。黒齒国と裸国は1セットです。
存在する方角は東南。海のはるか彼方です。

次にBグループは、黒齒国と裸国は直接の関係は有りません。
確かにともに南蛮の一種ですが、関わりはそれほどありません。
裸国は禹のエピソードで有名なようです。戦国策では「郷に入ては郷に従え」と云うように、禹が裸国において裸になったように、呉越の風習についても、中国人（華北）は理解すべきだ、それが礼の道なんだ。というような話で、後世の中華思想とはちょっと違う、健全な発想の内容です。

ところが、時代はそんなに違わないのに（ただし書かれたのは漢代、実際は戦国時代のエピソード）、王充の方は、禹のような聖人君子をもってしても、夷狄の連中に礼を教えることなどでできない。と言っていて、随分解釈が違います。どちらにしても、「禹は裸国に行った。その時、禹は裸国の風習に従って裸で生活した」というエピソードは有名なようです。また、戦国策において、裸国は禹の時代の国、黒齒国は、現代（戦国）の呉越の風俗であってその存在する時代も違ってきます。

Cグループは、東方の異民族の中に黒齒（国）人というのがいるというもの。ちなみに南方には裸国があります。扶桑という太陽の昇る木のある湯谷という場所の近くに、黒齒（国）人はいるようです。

さて、各グループの時代を見てみましょう。
BとCはともに周から戦国・前漢の時代で、ちかいです。ですがAは晋代であって、それより少し遅れます。このように見ると、陳寿が倭人伝に「黒齒国」「裸国」と記したとき、少なくとも、B・Cのグループに見える「黒齒」や「裸」を知っていたはずで、三国志の読者（陳寿にとっての）も、同じくB・Cのそれを連想したことでしょう。つまり、倭から東南に船で1年行った所に、禹の赴いた「裸国」や、扶桑の近くにある「黒齒国」があるんだと、そう思うはずで、

陳寿は魏志東夷伝の序文に、

東、大海に臨む。長老説くに、異面の人有り。日の出づる処に近し、と。
と記していて、それが「日の出づる処」扶桑の近くにあるという「黒齒国」を指すことを予告していたのです。目的地は倭の女王ではなく、その先の「日の出づる処」の近く、「黒齒国」だったので。

さて、「裸国」「黒齒国」があるという根拠（陳寿にとっての）は、何なのか。
まず、「裸国」は倭人伝に出てくる意味がありません。別に禹の話しを語るわけでもなく、名前しか書いていません。また、「黒齒」と並んで称されるのも今まで（漢まで）に例がありません。
それから、「黒齒国」「裸国」に中国人が訪れたわけではないのですから、東南の海の彼方にある国が「黒齒国」「裸国」だと、どうして言えたのでしょうか。

そう考えると、答えはひとつしかありません。倭人からの情報です。
また、倭人伝に載っている以上、「黒齒国」「裸国」は倭人の一派（倭種）と考えるのがスジです。
では、その倭人からの情報とは、どんなものだったのでしょうか。
「東南の海の彼方に、黒い齒をした人々や、服を着ない人々がいる」このようなものでしょうか。

でも、これでは、陳寿にとって、推定の域を出ません。そういうことであれば、陳寿はこう書くはずで
「東南に、黒い齒をした人々の国や、裸で生活する人々の国があるという。恐らく、われわれの言う黒齒国
や裸国であろう。」と。それを「黒齒国・裸国有り」と言い切るとは考えにくいのです。
考えられるのはひとつ、「倭人が『黒齒国』『裸国』という名称を用いていた」この可能性です。

当時の倭人の中には漢字の読み書きが出来る者がいたはずであることは、卑弥呼や壹与が、魏・晋と国書のやりとりをしていることから明らかです。

解説：女王国が文字を使って（外交・政治をしていた）いたと思われる魏志倭人伝の記述があります。

“伝送の文書・賜遺の物、女王に詣る…”

“正始元年 …中略… 倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。”

つまり、倭人が自ら、『黒齒国』『裸国』の名前を、この字面で、中国人に教えたことが考えられるのです。

「二倍年暦について」・・・古賀達也（古田史学の会代表）

古代日本列島において、倭人は一年を二つに分けて二年とする暦法、即ち「二倍年暦」を使用していたことが、古田武彦氏により明らかにされた

(1) それは魏志倭人伝と魏略の次の記述から導き出されたものだ。

「その人寿考、あるいは百年、あるいは八、九十年」（倭人伝）

「その俗正歳四節を知らず、ただ春耕秋収を計して年紀となす」（魏略）

倭人伝に記された倭人の年齢、「百歳あるいは八、九十歳」を従来の論者は「誇張」として退け、真面目に取り扱ってこなかった。古田氏『『魏略』の倭人記事は一年を春と秋とで区切る、二倍年暦を指し示したものであり、従って倭人の年令は五十歳、あるいは四十～四五歳と理解できるとされた。

一方、『三国志』に死亡時の年齢が書かれている九十名（全三百三十二名の二十七％）について、その年齢を調査した結果、平均は五十二・五歳であり、このうち、とくに高齢者であるため記載された例をのぞくと、その没年齢は三十代と四十代が頂点となっていることを明らかにされた。

これらの年齢に比べると倭人は「約二倍の長寿」となっていることから、倭人の年齢が二倍年暦によっていることを、実証的に論証された。この二倍年暦の発見により、『古事記』『日本書紀』の天皇の寿命が平均九十歳くらいである点も、リーズナブルな理解が可能となること

(2)、また浦島太郎の伝説（丹後風土記）が六倍年暦で書かれていること、聖書の『創世記』には、一四倍年暦（アダムの系図）、十二倍年暦（セムの系図）や二倍年暦による記載があることなども指摘され、これらを多倍年暦と名づけられた。

(3) 更には二倍年暦の淵源がパラオ諸島を含む太平洋領域であったとする仮説へと展開されたのである。

以上。

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使譯通ずる所三十國。

郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓國を歴るに乍ち南し乍ち東し、その北岸狗邪韓國に至る七千余里。

始めて一海を渡る、千余里、対海國に至る。その大官を卑狗と日い、副を卑奴母離と日う。居る所絶島、方四百余里なる可し。土地は山険しく深林多く、道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有り。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す。

※ 対海國・・・中華書局標点本は現在の地名「対馬」と改竄している。

又、南、一海を渡る、千余里、名づけて瀚海と日う。

一大國に至る。官を亦卑狗と日い、副を卑奴母離と日う。方三百里なる可し。竹木叢林多く、三千許りの家有り。田地有り、田を耕せども猶食するに足らず、亦、南北に市糴す。

又、一海を渡る、千余里、末盧國に至る。四千余戸有り。山海に浜うて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鮓を捕え、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。

東南陸行、五百里、伊都國に到る。官を爾支と日い、副を泄謨觚・柄渠觚と日う。千余戸有り。世に王有るも、皆女王國に統属す。郡の使の往来、常に駐まる所なり。

東南奴國に至ること百里。官をジ馬觚と日い、副を卑奴母離と日う。二萬余戸有り。

東行、不彌國に至ること百里。官を多模と日い、副を卑奴母離と日う。千余家有り。

南、投馬國に至ること、水行二十日。官を彌彌と日い、副を彌彌那利と日う。五萬余戸なる可し。

南、邪馬壹國に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を彌馬升と日い、次を彌馬獲支と日い、次を奴佳テイと日う。七萬余戸なる可し。

※ 水行十日・陸行一月・・・これは「郡からの全行程」である。

女王國自り以北、其の戸数・道里、得て略載すべし。其の余の旁國は遠絶にして得て詳らかにすべからず。次に斯馬國有り。次に已百支國有り。次に伊邪國有り。次に郡支國有り。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國あり。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に為吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に躬臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。

其の南、狗奴國有り。男子王為り。その官に狗古智卑狗有り。女王に属せず。

郡より女王國に至る、萬二千余里。

男子は大小と無く、皆黥面文身す。古自り以来、其の使中國に詣るや、皆自ら大夫と稱す。夏后小康の子、会稽に封ぜられ、断髮文身、以て蛟龍の害を避けしむ。今、倭の水人、好んで沈没して、魚蛤を捕え、文身し亦以て大魚・水禽を厭う。後稍以て飾りとなす。諸国の文身各異なり、或は左にし或は右にし、或は大に或は小に、尊卑差有り。其の道里を計るに、当に会稽東冶の東に在るべし。

※ 会稽東冶・・・ここを「後漢書」では「会稽東冶」と書き換えている。

その風俗は淫ならず。男子は皆露カイし、木繻を以て頭に招け、その衣は横幅、但結束して相連ね、略縫うこと無し。婦人は被髮屈カイし、衣を作ること単被の如く、其の中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。

禾稻・紵麻を種え、蚕桑・緝績し、細紵・ケン縣を出だす。其の地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲無し。兵に矛・盾・木弓を用う。木弓は下を短く上を長くし、竹箭は或は鉄鏃、或は骨鏃なり。有無する所、タン

耳・朱崖と同じ。

倭の地は温暖、冬夏生菜を食す。皆徒跣。屋室有り。父母兄弟、臥息処を異にす。朱丹を以て其の身体に塗る、中國の粉を用うるが如きなり。食飲にはヘン豆を用い、手食す。

其の死には棺有るも槨無く、土を封じて冢を作る。始め死するや停喪十余日、時に当たりて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。已に葬れば、拳家水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如くす。

其の行来・渡海、中國に詣るには、恒に一人をして頭を梳らず、キ蝨を去らず、衣服垢汚、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。之を名づけて持衰と為す。若し行く者吉善なれば、共に其の生口・財物を顧し、若し疾病有り、暴害に遭えば便ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹まず、と謂えばなり。

真珠・青玉を出す。其の山に丹有り。其の木にはダン・杼・豫樟・ホウ・櫪・投・僵・烏号・楓香有り。其の竹には篠・カン・桃支。薑・橘・椒・ジョウ荷あるも、以て滋味となすを知らず。ビ猴・黒雉有り。

其の俗挙事行来に、云為する所有れば、輒ち骨を灼きて卜し、以て吉凶を占い、先ず卜する所を告ぐ。其の辞は令龜の法の如く、火タクを視て兆を占う。

其の会同・坐起には、父子男女別無し。人性酒を嗜む。（注：魏略に曰う「其の俗、正歳・四節を知らず。但春耕・秋収を計りて年紀と為す。」）大人の敬する所を見れば、但手を搏ち以て跪拜に当つ。其の人寿考、或は百年、或は八、九十年。其の俗、国の大人は皆四・五婦、下戸も或は二・三婦。婦人淫せず、妬忌せず、盜窃せず、諍訟少なし。其の法を犯すに、軽き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸及び宗族を没す。尊卑各差序有り、相臣服するに足る。租賦を収む。邸閣有り。國國市有り。有無を交易す。使大倭、之を監す。

※ 國の大人は皆四・五婦、下戸も或は二・三婦・・・「後漢書」はこれを初歩的に誤解して「女子多し」などと書いている。

女王國自り以北には、特に一大率を置き、檢察せしむ。諸國之を畏憚す。常に伊都國に治す。國中に於て刺史の如き有り。王の使を遣わして京都・帯方郡・諸韓國に詣らしめ、郡の倭國に使用するに及ぶや、皆津に臨みて搜露す。伝送の文書・賜遺の物、女王に詣るに、差錯するを得ざらしむ。

下戸、大人と道路に相逢えば、逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、或は蹲り或は跪き、両手は地に抛り、之が恭敬を為す。対応の声を噫という。比するに然諾の如し。

其の國、本亦男子を以て王と為し、住まること七・八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿無く、男弟有り、佐けて國を治む。王と為りしより以来、見る有る者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯男子一人有り、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室・楼觀・城柵、巖かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す。

※ 倭國乱れ・・・「後漢書」は、その前の70～80年を乱れた年数と誤解して「倭国大乱」と書いている。

女王國の東、海を渡る、千余里、復た國有り、皆倭種。又、侏儒國有り。其の南に在り。人長三・四尺。女王を去る、四千余里。又、裸國・黒齒國有り。復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し。倭地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、或は絶え或は連なること、周施五千余里なる可し。

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし、郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏、吏を遣わし、將いて送りて京都に詣らしむ。

※ 景初二年・・・「梁書」に「景初三年」とあるのを優先させる論者が多いが、三年にしたほうが矛盾が多いのである。

其の年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く、

「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、汝献する所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じ、以て到る。汝が在る所遠きを躡え、乃ち使を遣わして

貢獻せしむ。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀れむ。今、汝を以て親魏倭王と為す。金印紫綬を仮し、装封して帯方太守に付して假綬す。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を為せ。汝が来使難升米・牛利、遠きを涉り、道路勤勞す。今、難升米を以て率善中郎將と為し、牛利を率善校尉と為し、銀印青綬を仮し、引見勞賜して遣わし還す。今、絳地交竜錦五匹（注：臣松之、以為らく、地は応に「糸へん十弟」と為すべし。……中略……魏朝の失に非ずんば、則ち伝写者の誤なり。）・絳地スウ粟ケイ十張・セン絳五十匹・紺青五十匹を以て、汝が獻ずる所の貢直に答う。又、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華ケイ五張・白絹五十匹・金八兩・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。還り到らば録受し、悉く以て汝が國中の人に示し、國家汝を哀れむを知らしむべし。故に鄭重に汝に好物を賜うなり」と。

正始元年、太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣り、倭王に拝仮し、並びに詔を齎し、金帛・錦ケイ・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に困って上表し、詔恩を答謝す。

其の四年、倭王、復た使大夫伊声耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青ケン・繇衣・帛布・丹・木フ・短弓矢を上獻す。掖邪狗等、率善中郎將の印綬を壹拝す。

其の六年、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむ。

其の八年、太守王キ官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭載・斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説かしむ。塞曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黄幢を齎し、難升米に拝仮し、檄を為して之を告諭せしむ。

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩。徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更相誅殺し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女、壹与、年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる。政等、檄を以て壹与を告諭す。壹与、倭の大夫率善中郎將掖邪狗等二十人を遣わし、政等を送りて還らしむ。因りて臺に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雜錦二十匹を貢す。